



複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

<日本古代学教育・研究センター>明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第23号

◆フィールドワーク

◇東日本プログラム

—東北日本プログラム日程概要—

実施：2017年12月12日（火）～14日（木）2泊3日

参加人数：学生8名、引率教員3名 合計11名

実施場所：新潟県・福島県

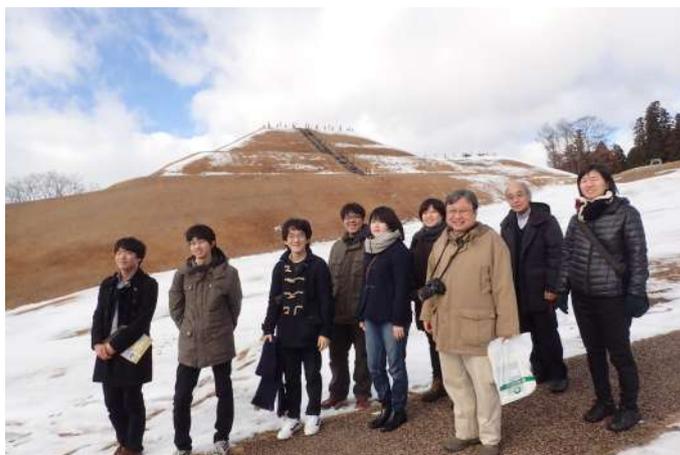
<フィールドワーク調査日程概要>

12/12 東京駅出発。長岡駅到着。新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物科学博物館、新潟市文化財センターなど見学。

12/13 新潟県埋蔵文化財センター、会津坂下町亀ガ森・鎮守森古墳、福島県立博物館など見学

12/14 大安場古墳群・史跡ガイダンス施設、白河市歴史民俗資料館、小峰城跡、福島県文化センター白河館まほろんなど見学。

JR新白河駅より新幹線で帰京。



◇参加記

博士前期課程1年 中島 皓輝

2017年12月12日から14日までの3日間、新潟県・福島県にて東北日本プログラムが実施された。12日、13日には新潟県内の遺跡・博物館を巡見し福島県会津坂下町へ移動、14日にはいくつかの博物館・遺跡を見学しながら白河市へ向かう行程で、この中には会津大塚山古墳なども含まれていた。しかし、川端康成の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」という一

文を見事に再現するかのよう、大清水トンネルを抜けた我々を待ち受けていたのは雪に覆われた町であった。強い寒気の到来と重なっていたため、降り積もった雪によって、遺跡の現地見学は行えない状況となっていた。そのため、大幅に予定を変更し、急遽見学する博物館を増やすなどの対応がとられた。

そのように天候に左右されるプログラムではあったが、学史上著名な馬高遺跡などの縄文土器をはじめとして、数多くの遺跡・博物館の見学からは新たな見聞がいくつも得られた。

専門的に扱っている遺物や時代こそ異なるが、重要文化財に指定されている実資料を観察する機会をいただけたことで、多くの情報を得ることができる非常によい機会となった。とりわけ新潟県では、その地理・地質的条件から埋蔵文化財の残存状態が良いこともあり、土器表面に残る痕跡をよく観察することができた。また、そうした環境から木製品もよく残っていることもこの地域の特徴であり、その豊富な出土量には強い驚きを抱いた。

目次

フィールドワーク

高麗大学校プログラム

P.1

南カリフォルニア大プログラム

p.2

第8回明治大学・高麗大国際学術会議

p.2

国際学術研究会「交響する古代Ⅷ—古代文化

資源の国際化とその意義VOL.3—」

p.5

明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との

考古学・古代史大学院生研究交流プログラム

p.7

プログラムの軌跡

p.8



また、それら文化財の活用として、新潟市や長岡市、津南町などが中心となって日本遺産“「なんだ、コレは！」信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化”の活動が積極的に行われていた。火焰型土器を目玉とした町おこし、観光を盛んに行っている様子からは、文化財活用の軸が遺跡から遺物へと広がってきているのだと強く感じた。

遺跡、またそれが存在する空間的な情報は実際に現地へ赴かない限りは理解することができないものであり、雪が降るという日常の一風景を遺跡へと還元する、気候条件も含め総合的に遺跡を分析する必要性を痛感した旅でもあった。

末筆ではありますが、このような貴重な機会を与えてくださった先生方、また快く見学を許可してくださった皆様、関係者の方々に感謝申し上げます。

◇南カリフォルニア大プログラム

実施日：2018年2月14日（水）～19日（月） 5泊6日

参加人数：院生4人、引率教員3人

実施場所：南カリフォルニア大学

〈USCプログラム・フィールドワーク概要〉

2/14 成田空港発、ロサンゼルス空港着

2/15・16 USCにおいて学術交流

2/17 ノートン・サイモン美術館など見学

2/18 ロサンゼルス空港発 2/19 成田空港着



◇参加記

博士後期課程3年 関 恭平

今年度の南カリフォルニア大学プログラムは2月14日から2月19日の日程で行われた。日本からの参加者は考古学・日本史学・日本文学の院生4名と教員3名である。14日に現地に入り、15・16日に学術交流会が行われ、17日には美術館を見学した。18日朝にロサンゼルス空港を出発し19日の夕方に日本に到着した。

学術交流会では、15・16日それぞれ七名の発表があった。考古学・日本史学・日本文学各分野に関する発表が行われ、時代の幅も古墳時代から近世までと広がりがあった。私の発表は二日目であり、「源氏物語における宇治の変容」というテーマで行った。源氏物語宇治十帖において、宇治はそれまでの文学作品で描かれてきたような美しい土地としてではなく、

「荒々しい」土地として描かれる。そして、その「荒々しさ」は物語内で強まっていく、という主旨のものである。発表に対しては、USCの方からもご質問を頂いた。その質問は源氏物語を読み込んでいなくてはできないようなものであった。源氏物語は世界的な文学としてあることは知られるところである。しかしながらそのことを実感したのはその質問を頂いたときであった。

異国において日本の文化がどのようにして受容されているかは漠然とではあるが知っている。しかしながら実際に海外に行き、その受容のさまを直接目の当たりにする機会はこれまでになかった。また海外における日本に関する研究も、交響する古代などのシンポジウムにて聞き知る機会を得てはいたが、実際に海外で

その研究方法に触れることはなかった。学術交流会では、江戸時代の土佐の巡見記録に基づいた研究や同じく江戸時代の琉球の儀礼の式次第をもとにした研究、女性文人である菊舎についての考察や神功皇后の神格化に関する調査、ほかにも京都御所東山御文庫の曝涼行事に関する報告などを聞くことができ、海外における日本研究に直接触れることができた。そのことだけでも、今回の学術交流会には重要な意味を見出すことができた。

また、学術交流会以外の場でも多くの刺激を得ることができた。ノートン・サイモン美術館では幅広い時代の芸術作品を見ることができた。懇親会の席では海外の研究者の様々なお話を聞くことができた。とくにルーク・ロバーツ教授からはたくさんのお話を伺った。辞書をめくってもわからなかった土佐の方言がその土地の人に直接聞くとすぐにわかったというお話、



というお話、男性文人よりも女性の私的な手紙の方が解釈は難しいというお話などである。懇親会の席以外でも海外における日本研究に関して聞く機会があった。美術館からホテルへ向かう車中では、日本語資料の英訳の際には一つの語に対してどのような訳語をあてるのかを長い時間かけて行われるのだという話を聞いた。さまざまな候補があげられ、議論が交わされるのだという。

以上のように学術交流会を通して、海外の研究者が持つ日本とは異なる視点や方法、認識に多く触れることができた。それは自分自身の研究をそれまでとは異なった視点で捉える直す貴重な機会でもあった。



◆第8回明治大学・高麗大学校国際学術会議

日時：2017年11月10日・11日

場所：明治大学グローバルフロント

◇参加記

博士後期課程2年 竹内 章太

2017年11月10日～11日にかけて、第八回明治大学・高麗大学校国際学術会議が開催された。会場となった明治大学駿河台キャンパスグローバルフロントでは、「韓日の文学・史学研究の現在」というテーマのもと、両校の先生方と大学院生の計34名が講演および研究発表を行った。私もまた発表者の1人として参加し、本記を記す機会をいただいたので、以下に発表を通して抱いた所感を述べたい。

基調講演と企画主題発表を中心とした10日の日程が終わると、翌日、11日には、専攻ごとに研究発表が行われた。ただし、専攻ごとに分かれたとはいえ、発表の聞き手は韓国語のテキストの研究者であり、ま

た、言うまでもなく文学研究の領野は広い。韓国文学や他分野の専門家からの忌憚のない指摘に対して、私は適切に返答することができず、心苦しい思いをした。

発表を通して私が感じたのは、言語と専門分野の垣根だった。しかしながら、私の感じた垣根は、必ずしもネガティブなものではない。垣根を隔てていたからこそ、会場からの指摘は、私にとって、驚きと喜びをともなう新しい知となりえたのである。本学術会議での発表は、グローバル化によって顕在化する研究の垣根をポジティブに享受する貴重な体験となった。

◇参加記

博士前期課程1年 渡辺 早貴

2017年11月10日～11日にかけて、明治大学駿河台 キャンパスグローバルフロントにて、第8回明治大学・高麗大学国際学術会議が行われた。10日は、企画 主題の発表を中心に、2日目である11日はA組・B組に分かれて明治大学・高麗大学の院生が各々の研究について発表を行った。

私自身、2日目に自身の研究を発表を行った。討論の形式としては、明治大学の学生が報告した際には、高麗大学の院生が質疑をおこない、高麗大学の学生が報告した際には、明治大学の学生が質疑を行うというものである。私の発表は「一条期の公祭化—吉田祭について—」という内容で報告させていただいた。吉田祭公

祭化を通じて、神祇祭祀の面からみた摂関政治期における天皇の位置づけというものを考えるうえで、何か画期となるのではないかという内容で発表させていただいた。質疑応答では、普段の研究をしているだけではわからない、意義のある質疑をいただき、自身の研究をする上で、幅広い視野でもう一度研究をするべきであると再認識させていただいた。

この度の、学術会議に発表者として参加させていただき、研究面で気付くことが多く、大変貴重な経験をさせていただいた。最後ではあるが、今年度の学術会議の関係者の方々に感謝を申しあげたい

明治大学・高麗大学国際学術会議プログラム日程表

第1日目 2017年11月10日		於：明治大学 グローバルホール
鄭雨峰	高麗大 国語国文学科教授	「通信使李東郭の日本使行録について」
侯冬梅	曲阜師範大学 翻訳日本語学部講師	「大庭みな子と魯迅—「野草」を介して」
崔貴默	高麗大 国語国文学科教授	「中世時期における民族語詩歌漢詩の韻律の受容—日本と越南の事例を中心に」
高橋麻織	明治大学 文学部 兼任講師	「『栄花物語』における「御佩刀の儀」の意義—『源氏物語』と創造された〈歴史〉—」
宋亮燮	高麗大 韓国史学科教授	「19世紀の賦税運営と「郷中公論」の台頭」
伊勢弘志	明治大学 文学部 助教	「近代日本の軍事戦略と韓半島」
中村友一	明治大学 文学部 専任講師	「日本古代の「連公」考」
金孝珍	明治大学 文学部 兼任講師	「新羅と古代日本における仏教の伝来—受容をめぐる摩擦と女性の役割を中心に」
李相雨	高麗大 国語国文学科教授	「異郷の新劇から故郷の新劇へ。韓国新劇運動の開拓者、洪海星」
李喜榮	高麗大BK21 PLUS 韓国語文学未来人材育成事業団研究教授	「李奎報の排律の研究」
ニコラ・シニョノレ	ボノレドール・モンテニニ=大学・大学院生	The representations of gay men in Japanese pop culture and the American influence
劉バダ	高麗大BK21 PLUS 韓国史学未来人材養成事業団研究教授	「金允植と博文局の自主独立の認識—『萬国政表』を中心に」

第2日目 2017年11月11日

於：明治大学グローバルフロント 2階4021教室

沈慶昊	高麗大 漢文学科教授	「20世紀初における漢詩の曳尾と俗化」
吉村武彦	明治大学 名誉教授	「倭国の政治的・文化的発展と百濟・高句麗」

院 生 発 表 A 会 場 (4021教室)

上村 菜由	明治大	「『源氏物語』の乳母・宣旨の娘の背景—父宮内卿を始点として—」
劉海 仁	高麗大	「『傳奇漫録』に登場する女鬼にの存在論」
上條 龍一	明治大	武者小路実篤の小品集論—「小品九つ」について—
鄭 秀眞	高麗大	「崔仁勳の戯における創作原理—意図された「亡命」と「書き直し(re-writing)」
木村 愛美	明治大	「谷崎潤一郎「嘆きの門」試論—「衣裳が生み出す謎の少女—」
鈴木 杏花	明治大	「太宰治『人間失格』論のための覚書」
金紀 燁	高麗大	「談草」に表れる魚允中の対外認識の研究」
許 眞	高麗大	「郷愁と愛情・tvNドラマ「応答せよ1994」と「応答せよ1997」の分析」
柳澤 広識	明治大	「志賀直哉「或る朝」に関する一考察 「三つの処女作」という規定を中心に」
竹内 章太	明治大	「江戸川乱歩『目羅博士の不思議な犯罪』におけるガブリエル・タルド受容」

院 生 発 表 B 会 場 (4031教室)

里館 翔大	明治大	「平安時代の籍帳制度を再評価する—9～10世紀の事例から—」
朴環 吁	高麗大	「百濟蓋鹵王代の対北魏外交に関する史料の検討」
三浦 直人	明治大	「吾輩の名前はまだ読めない—複名俗と一人一名制のあいだ—」
文敏 基	高麗大	「『脱冷戦』時期の韓国資本家の認識と対応」
邱 帆	明治大	「興亜会アジア主義の特質に対する再検討」
林成 洙	高麗大	「17世紀の量田の施行と戸曹収入の変化」
松尾 悠亮	明治大	「福岡藩主黒田斉清の世界認識」
鄭用 健	高麗大	「播溪柳馨遠の東国史再編の意識」
渡辺 早貴	高麗大	「撰閣政治期の祭祀—一条朝における公祭・吉田祭について」
魯耀 翰	高麗大	「世祖命撰『易学啓蒙要解』刊行と義意」

◆国際学術研究会

「交響する古代Ⅷ—古代文化資源の国際化とその意義VOL.3」

日時：2017年11月30日（木）

12月 1日（金）

場所：明治大学アカデミーコモン(11/30)・グローバルフロント(12/1)

◇参加記

博士後期課程3年 山口 直美

国際学術研究会『交響する古代Ⅷ』は2017年11月30日（木）～12月1日（金）に開催された。私は院生報告会の発表者のひとりとして加わる機会を得て、「文学からみるタケウチノスクネ研究—訓の問題を中心に—」と題して発表した。『古事記』の建内宿祢について取り上げる際、〈タケウチスノクネ〉、〈タケシウチノスクネ〉等、複数の訓があるとわかる。この揺れをどのように考えるべきか、諸本、注釈書等の確認、先行研究の整理を行い、いくつかの可能性について言及した。会場からは、発表で取り上げた諸本だけではなく、例えば神社等の神名などテキスト以外の資料を検討に加えてはどうか、といった広い視野から指摘をいただくことができ非常に勉強になった。

また、今回の学術研究会の全体のテーマは引き続き「古代文化資源の国際化とその意義」と設定されている。これは、明治大学が所蔵する日本古代学関係資料群（杉原荘介・岡正雄・井上光貞）の活用を目指し統合型検索システム構築作業を進めていることと関連しており、データベースの公開・活用方法について等の発表がされた。その中で特に興味深く伺ったのは、井川史子先生（マギル大学名誉教授）のご発表であった。「杉原先生・岡先生と海外交流」というタイトルにあるように、杉原先生、岡先生と関わるようになった経緯やご自身の研究にとってどのような存在であるか、更にお二人の学説の影響力についても資料交えご発表された。私は古代文学と民族学（民俗学）には深

深い繋がりがあることから、検索システムの一部である岡正雄資料群の整理を担当する一人として、このプロジェクトに関わる機会をいただいている。整理をする資料群には、研究のメモや当時の写真等々、複数の言語による様々な〈モノ〉がある。その〈モノ〉たちにはそれぞれ背景があるが、普段それを認識する機会はそれほど多くはない。今回の井川先生のお話から、当時の時代背景や空気感、出来事の微妙なニュアンスが伝わり、当時の研究事情や日本民族学が

立ち上がっていく様子を豊かに想像することができた。岡正雄を取り巻く当時の状況の一端を伺い知ることができた貴重な機会であると同時に、今後資料をどのように公開活用していかを考える場でもあった。

2日間の学術研究会では、院生報告会を通じて自身の研究を深める機会をいただいたこと、データベースの重要性や資料活用の方法を考える機会をいただいたことに感謝し、以上参加記とさせていただきます。

交響する古代VIII << 古代文化資源の国際化とその意義 Vol.3 >> プログラム

	【大学院生発表】		
11月	里舘翔大	明治大学	「筑前国嶋郡戸籍の造籍方針一嶋評戸門変動記録木簡に触れて」
	関恭平	明治大学	「源氏物語末摘花巻における「葎の門」の話型と自然表現」
	【報告】		
30日	申敬澈	釜山大学名誉教授	「加耶の情勢変動と倭」
	ヨハネス・ヴィルヘルム	慶應大学総合政策学部准教授	「岡正雄とウィーン大学における日本研究の発祥と流れ」
	石川日出志	明治大学文学部教授	「杉原荘介と中韓考古学交流」
	佐々木憲一	明治大学文学部教授	「杉原荘介の北アメリカ研究者との交流」
	井川史子	Canada McGill University名誉教授	「杉原先生・岡先生と海外交流」
	【大学院生発表】		
12月	橋本剛	早稲田大学	「格からみた律令国家の帰化政策」
	山口直美	明治大学	「文学からみたタケウチノスクネ研究」
	【報告】		
1日	湯浅幸代	明治大学文学部准教授	「江戸中期における『源氏物語』注釈書・土肥経平『花鳥芳轉』について」
	牧野淳司	明治大学文学部教授	「源氏物語注釈の諸相」
	志村佳名子	明治大学研究・知財戦略機構研究推進員	「明治大学中央図書館所蔵『除秘鈔』『除秘鈔附』の「発見」とその意義」
	矢越葉子	明治大学研究・知財戦略機構研究推進員	「日中古代史料群のデータベースとその活用」
	加藤友康	明治大学大学院文学研究科特任教授	「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（新大型研究）における統合型検索システムの開発と文化資源化」

◆明治大学と大阪大学・関西大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院 生研究交流プログラム

日 時：2018年1月7日（日）・8日（月祝）
会 場：大阪大学豊中キャンパス文法経済学部本館・大会議室
参加人数：教員 9人、院生 30人、合計 39人

……プログラム……

【開会挨拶・趣旨説明】 石川日出志（明治大学）

- | | | |
|-------|----------|--------------------------------------|
| 川崎雄一郎 | （京都府立大学） | 「縄文時代定角式磨製石斧の生産とその機能」 |
| 大木美南 | （明治大学） | 「縄文時代におけるクリ利用の研究」 |
| 齋藤直樹 | （明治大学） | 「茨城県における古墳時代中期から後期にかけての埴輪生産体制の成立過程」 |
| 内藤元太 | （大阪大学） | 「大和盆地南部における古墳時代後期の埴輪生産に関する予察」 |
| 箕浦 絢 | （明治大学） | 「古墳時代の武蔵における鉄鏃の分析—墳墓出土品と集落出土品の比較検討—」 |
| 中村彰伸 | （京都府立大学） | 「古墳時代後末期における畿内横穴墓の立地と階層性」 |
| 辰巳俊輔 | （関西大学） | 「横口式石槨の構造からみた型式分類と編年」 |

【二日目の挨拶】 菱田哲郎（京都府立大学）

- | | | |
|-------|--------|--------------------------|
| 越智勇介 | （大阪大学） | 「六国史に見える堤防修築記事の検討」 |
| 溝口優樹 | （大阪大学） | 「土師氏の系譜と政治的動向」 |
| 牛尾冬吾 | （関西大学） | 「三鈷鏡（さんこにょう）の変遷と意義について」 |
| 松元みゆき | （明治大学） | 「葬送における「懸骨」人について」 |
| 盧柔君 | （大阪大学） | 「機能からみた10世紀代越窯系青磁碗」 |
| 中島皓輝 | （明治大学） | 「『小右記』に見る摂関期右近衛府下級官人の構成」 |

【閉会挨拶】 福永伸哉（大阪大学教授、考古学）

◇参加記

博士前期課程1年 箕浦 絢

本年度も大阪大学豊中キャンパスに於いて、2018年1月7日（日）・8日（月祝）の2日間にわたり、明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史の大学院生を中心とした研究交流プログラムが開催された。参加者は発表者13名を含む39人（うち教員9名）であった。

今回、私は1日目の中盤に「古墳時代武蔵の集落出土鉄鏃」をテーマとして発表させていただいた。武蔵地域を対象としていたため関西の方々にはあまり馴染みのない地域であったかと思う。しかしこれまで研究がほとんどなされてこなかった集落出土鉄鏃を対象資料としたことには非常に興味を持っていただき、出土集落の性格を加味する必要性、1住居跡1点の出土が狩猟用矢鏃といえるかどうかということや、集落住居跡に廃棄された鉄鏃は意識的によるものか無意識によるものかなど、様々なご指摘やご教授をいただいた。また他の発表者の方から、その方自身の発表内容と関



連するご質問をいただき、お互いの研究を進めていくうえで非常に刺激的でまた重要な討議を行うことができました。

今回のプログラムでは縄文時代の研究に関する2本の発表や、古墳時代の埴輪に関する研究が2本と関連性のある土師氏についての研究発表、また私の鉄鏃研究と鉄鏃を分析資料のひとつとした横穴墓の階層性に関する発表など、関連性のある研究発表が多く、聞いている側も非常に面白くまた知識を深めることができた。さらに、三鈷鏡や懸骨人に関する発表など、これまであまり学ぶ機会がなかった研究についても聞くことができ、非常に興味深く自身の研究の幅も広がった

ようであった。

私は昨年度も聴講として参加させていただいており、多くの方の発表を聞き、また討議をさせていただいた。こういった「他流試合」をする機会はなかなかないが、非常に重要な経験であると考えている。まず大学の枠を越える、しかも関東と関西という地域を越えた交流であり、それぞれ主に対象とする地域が異なることから研究の前提条件や観点が異なることもあるため、新たな視点での研究を学ぶことができる。さらに考古学と古代史といった、同じ歴史学に含まれる近い分野でありながらも研究対象が「物的資料」と「文字史料」と異なる分野での交流であるため、互いの知識を取り入れることで研究を深めることができる。また単純に他分野、他大学の先生方からご指摘をいただき、院生の方々と交流を深めることができるため、自身や自身の研究を発展させるために必要な機会であると考えている。

末尾ながら、毎年会場の手配や運営をしてくださる大阪大学の皆様、また本プログラムの継続的な開催にご尽力いただき発表の機会を与えてくださった諸先生方、関係者、参加者の

皆様には深く感謝の意を申し上げます。



◇2017年度プログラム（後期）の軌跡

- | | |
|-----------------|---|
| 2017/11/10,11 | 明治大学・高麗大学国際学術会議プログラム |
| 2017/11/30～12/1 | 国際学術研究会「交響する古代Ⅷー古代文化資源の国際化とその意義VOL.3一」開催 |
| 2017/12/12～14 | 東北日本プログラム（2泊3日） |
| 2018/1/7～8 | 明治大学と大阪大学・関西大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム開催(於：大阪大学) |
| 2018/2/14～2/19 | 南カリフォルニア大学プログラム（5泊6日） |
| 2018/3/26 | 紀要『日本古代学』第10号発行 |
| 2018/3/29 | ニューズレター第23号発行 |

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

日本古代学教育・研究センター：猿楽町第二校舎3階 TEL:03-3296-4492

E-MAIL jkodaken@meiji.ac.jp ホームページ http://www.meiji.ac.jp/dai_in/arts-letters/jkodaken

教務事務部大学院事務室：グローバルフロント5階 TEL:03-3296-4143 FAX:03-3296-4352